



Title	もうひとつの啓蒙論：『ドイツの新聞』紙上の懸賞論文（1784年）の再検討
Author(s)	吉田, 耕太郎
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2017, 57, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

もうひとつの啓蒙論

— 『ドイツの新聞』紙上の懸賞論文（1784年）の再検討

吉田 耕太郎

はじめに

1784年からドイツの領邦都市ゴータにて発刊された『若者たちそしてその友たちに向けたドイツの新聞、今日の間、習俗、国々について道徳向上のために書き伝えるもの』（以下『ドイツの新聞』）¹⁾紙上にて、懸賞論題が掲載された。

懸賞論題は、「子どもの病んだ心を健康にもどすにはいかなる手段はいかなるものか」というものだった。翌年の締切までに応募された論文は全部で6本、そこで受賞したのは、ハイネ・ジュニアという人物の『子どもの病んだ心を健康にもどすにはいかなる手段はいかなるものかという問いについての回答』（以下『回答』）²⁾であった。

18世紀ドイツの啓蒙論といえば、カントやメンデルスゾーンらの啓蒙論がすぐに思い浮かぶが、ハイネの『回答』が同時期に著されたのもまた偶然ではない。カントらの啓蒙論が誕生する契機となったのは、民衆を欺かれた状態におくことが有益かどうかを問うた、1777年に告示された（そして1780年に受賞論文が審査された）ベルリン・アカデミーの懸賞論題³⁾がひきおこした混乱のなかでの、プロイセン知識人たちの論議であったことはよくしら

1) *Deutsche Zeitung für die Jugend und ihre Freunde, oder moralische Schilderungen der Menschen, Sitten und Staaten unsrer Zeit* (Gotha 1784-1795) 途中から『ドイツの国民新聞』*National-Zeitung*と名前をかえてウィーン会議前後の1812から1813には発禁処分をうけている。『ドイツの新聞』とドイツナショナリズムとのつながりを指摘する研究もある。Wolfgang Martens, *Laßt uns besser werden! Gleich wird's besser seyn!* in: Holger Böning (Hg.), *Französische Revolution und deutsche Öffentlichkeit*, München 1992, S. 274-296; hier S. 275f.

2) [Friedrich Adolf Heyne], *Herrn Heyne des Jüngern Beantwortung der Frage, Welches sind die besten Mittel, den kranken Verstand eines Kindes gesund zu machen?* Leipzig 1785.

3) 懸賞論文についての研究として、Cornelia Buschmann, *Die philosophischen Preisfragen und Preisschriften der Berliner Akademie der Wissenschaften im 18. Jahrhundert*, in: Wolfgang Förster (Hg.), *Aufklärung in Berlin*, Berlin 1989, S. 165-228; Gunhild Berg, *Sind Preisfragen die aufklärerisch-öffentliche Form der disputatio? Ein Antwortversuch am Beispiel der Berliner Volksbetrugs-Frage von 1780*, in: Marion Gindhart und Ursula Kundert (Hgg.), *Disputatio, 1200-1800*, Berlin 2010, S. 167-201.

れているが、実はハイネの『回答』が応えた『ドイツの新聞』の懸賞論題もまた、ベルリン・アカデミーの論題の余波のなかからでてきたものであった。というのも『ドイツの新聞』を発売していたのは、ベルリンの懸賞論題で受賞論文を書いたルドルフ・ツァハリアス・ベッカー⁴⁾であったからだ。この意味で『ドイツの新聞』紙上で告示された懸賞論題そしてハイネの『回答』は、カントやメンデルスゾーンの啓蒙論と同時期に誕生したもうひとつの啓蒙論ともいえるものである。本論は、このもうひとつの啓蒙論が誕生することになる背景を明らかにし、このもうひとつの啓蒙論の思想史的な布置の再確認をこころみるものである。

啓蒙論争のなかのハイネの『回答』

この『ドイツの新聞』紙上の懸賞課題ならびにハイネの『回答』については、これまで主体的に研究されてきたことはなかった。子ども病んだ心を健康にするというこのタイトルのもつ意味については後ほど考察するが、『回答』の主張内容が、早期教育の必要性ならびに教育環境の改善にあるため、今日では、18世紀ドイツの教育史をあつかった研究で一次文献リストに書名が掲載される程度の、教育への感心が高まった時代の数多の教育書の一冊として埋もれてしまっている。さらに匿名で発刊されたことも、これまで着目されてこなかった要因でもある。

そもそも18世紀の懸賞論文のしきたりとして、論文の審査は匿名でおこなわれていた。論文原稿には執筆者の名前は記してはならず、その代わりに論文の冒頭にはモットーが添えられた。こうした匿名の審査は、ハイネ・ジュニアのような若者が突然文壇に登場するための機会ともなった⁵⁾。

『ドイツの新聞』で受賞したハイネの『回答』は、Dubitatio initium sapientiae（疑ウコトガ、知ノ始マリデアル）のモットーで審査されていた論文であり、受賞論文の公刊も、なぜかハイネ・ジュニアという半ば匿名でおこなわれた。この実名を隠すかのような論文の発刊に対しては、「あの有名なハイネと同じ姓であることを示したいのか、[...] 読者にとっては、彼が誰であるのか確かめる必要はない」⁶⁾と、当時の書評誌でも批判されていた。「あの有名

4) ベッカーの研究については主に下記ものを参照した。Hanna-Verena Kissel, *Erziehung des Volkes im Jahrhundert der Aufklärung: Das politische Weltbild der populärsten Schrift der Volksaufklärung*, Saarbrücken 2013; Reinhart Siegert, *Aufklärung und Volkslektüre-exemplarisch dargestellt an Rudolph Zacharias Becker und seinem "Noth- und Hilfsbüchlein"*, Frankfurt 1978; 田口武史『R.Z. ベッカーの民衆啓蒙運動』鳥影社 2014。

5) Vgl. Cordula Neis, *Anthropologie im Sprachdenken des 18. Jahrhunderts*, Berlin 2003, S. 84f. それぞれのモットーと著者の名前の元データとなる論文を包んでいた封筒は、審査員以外が管理をしている。受賞論文が決まると、モットーと受賞者名がともに発表された。

6) *Allgemeine deutsche Bibliothek*, 69.Bd.(1786), 1.St., S.232.

なハイネ」とは、ゲッティンゲン大学の文献学者であるクリスティアン・ゴットローブ・ハイネ（1729-1812）のことであろうが、ハイネ・ジュニアは、このゲッティンゲンのハイネとは無関係であった。

このハイネ・ジュニアが誰であるのか、ジーゲルトの研究でも C. L. Heyne と詳しい同定を避けるように記載されている⁷⁾。追悼説教集を調べてみると、フリードリヒ・アドルフ・ハイネという 1760 年に生を受け 1826 年に亡くなった人物がこのハイネ・ジュニアであったと考えられる⁸⁾。匿名で審査される懸賞論文は、時に無名の若者を一躍文壇のスターへと引き上げることもあったが、このハイネは、文壇のスターにはならなかったようだ。追悼説教によれば、彼は牧師ヨーハン・クリスティアン・ハイネを父として、1760 年に生まれたが、身体が弱くて牧師になれず、各地で貴族の住み込みの家庭教師、子息の旅行や大学進学のお供をしつつ、最終的には、ザクセン＝コーブルク＝ザールフェルトの顧問官の称号と年金を受け取りながら、親戚を頼ってザクセン州中部の小村ロホリッツにて晩年を過ごしたと記述されている。「とりわけ名声は得ることはなかったものの、教育への強い関心は、彼を、常に子どもの世界に向けさせることになった」⁹⁾と生涯が締めくくられてはいる。説教によると、ハイネが残した著作は懸賞論文とそれ以外に 2 冊¹⁰⁾のみ、作家や教育者として名声を残すことはできなかつたようだ。

匿名での出版について批判した書評も、『回答』の内容については好意的であり、「誰にでもわかりやすく書かれている」点を評価し、「教育現場にて著者の提案を応用することができる」¹¹⁾と、その実践的な価値を認めている。しかし、すでに冒頭で触れたように、この『ドイツの雑誌』紙上の懸賞論文を発案し、ハイネの論文を受賞論文として決定したのが、ベッカーであったことを考慮に入れるならば、このハイネの『回答』は、良く書かれた教育書である以上に、1780 年以降のドイツにおける啓蒙論のひとつの展開として読むことも可能となる。

このもうひとつの啓蒙論について、まずはその発端となったプロイセン・アカデミーの懸賞論題がひきおこした混乱を、二つの受賞論文、更にこの二つの受賞論文の余波のなかで生まれたメンデルスゾーンとカントの啓蒙論を手がかりに確認することにしたい。

7) Siegert, a.a.O., Sp. 1329f.

8) *Neuer Nekrolog der Deutschen*, 4.Jg.(1826), 2.Th., Ilmenau 1828, S. 965f.

9) Ebenda, S. 965.

10) ハイネの他の著作は以下の通り。*Die sehr leichte Kunst, unsere Wohnungen feuerfest zu machen und unsere Waldungen vom Untergang zu retten*, (Freiberg 1803); *Pflanzencaender oder Versuch einer Anweisung, welche Pflanzen man in jeden Monat in ihrer Blüthe finden können*, (Leipzig 1804, 1806 u. 1812) こちらは花の学術名を列挙しているだけのものではないのだが、3版を重ねている。

11) *Allgemeine deutsche Bibliothek*, 69.Bd., 1.St., S. 235.

ベルリン・アカデミーの懸賞論題とその混乱

1780年に受賞が発表された懸賞論文は、そもそも1777年にベルリン・アカデミーが告示した論題への回答であった。この論題を発案したのは時の為政者フリードリヒ2世で、「民衆が欺かれているのは有益かどうか」というものであった¹²⁾。

18世紀的な表現を用いるならば、啓蒙とは、人間を完全性にいたるよう導くこと、つまり人間がそもそも持っている諸能力を最大限に発揮させることであり、そのために無知蒙昧を振り払うことで真理、善、正しい趣味を獲得させて、幸福で安泰な生活を送ることができるよう導く運動であった。とすれば、民衆を欺いた状態にとどめておくことが有益かどうかを問うことは、人間を完全性へと向かわせる啓蒙の営みをとどめておくこともまた有益なのではないか、と問うことを意味した。その結果、これまでよきものとして無自覚に進められてきた啓蒙は、突如として自己反省するよう促されることになったのである。

この懸賞論題に対しては、民衆を欺いた状態におくことを有益とする立場と、それを否定する立場のふたつの論文が受賞することになった。「いかなる種類であれ誤謬というものは、公共のまたは私的な幸福にとって害である。誤謬を持ち続けること、さらには誤謬を増やすこと、こうしたことよりも、民衆から、徐々に誤謬を取り除くことに取り組むことのほうがよいことなのだ」¹³⁾と、民衆を欺いた状態におくことを真っ向から否定したのが、ルドルフ・ツァハリアス・ベッカーであり、「欺かれた状態におかれていることが有益な場合もありうる」¹⁴⁾と論じたフレデリック・デ・カステイオンがもうひとりの受賞者だった。

ふたつの相反する立場が受賞論文として選ばれたことは、啓蒙の進む方向に一致した見解をもはや抱くことができなくなってしまった思想状況を、象徴しているといえるだろう。田口のベッカー研究の言葉を引用するならば、1780年以降、啓蒙とは何かを直接問題することなく、啓蒙は、統治という局面において有益であるかどうかという観点で考えられるようになった。またヴェルナー・シュナイダースの整理によれば、ここで啓蒙は、自己反省への隘路に陥り、身分や職種に応じた啓蒙運動のような、啓蒙の限度の策定へと方向転換するこ

12) 1780年の懸賞論文については下記の研究を参照。Hans Adler, *Nützt es dem Volke, betrogen zu werden? - die Preisfrage der Preußischen Akademie für 1780*, Stuttgart 2007; 吉田耕太郎「啓蒙の時代の啓蒙への問い」『啓蒙の運命』(富永茂樹編)名古屋大学出版会、2011、pp. 12-38; 田口、前掲載書、23ff.

13) Rudolf Zacharias Becker, *Beantwortung der Frage - Kann irgend eine Art von Täuschung dem Volke zuträglich sein, sie bestehe nun darinn, daß man es zu neuen Irrthümern verleitet, oder die alten eingewurzelten fortdauern läßt?*, Leipzig 1781, S. 135.

14) Frédéric de Castillon, *Dissertation sur la question extraordinaire - Est-il utile au Peuple d'être trompé, soit qu'on l'induisse dans de nouvelles erreurs, ou qu'on l'entretienne dans celles où il est?*, Berlin 1781, S. 22.

となる¹⁵⁾。とりわけ1786年にフリードリヒ2世が亡くなると、啓蒙的な雰囲気への反動がおこる。1788年にヨーハン・クリストフ・フォン・ヴェルナーが発布する宗教令へと向かうキリスト教回帰の風潮のなか、プロイセンでは啓蒙の自制が、ますます求められることになった。

この懸賞論題が契機となってベルリンの主要な知識人が参加する水曜会では、啓蒙をめぐる論議がはじまった。メンバー向けの回覧文には、1780年のふたつの受賞論文についていまいちど精査する必要があるとしっかりと書き残されているように¹⁶⁾、啓蒙について考えることは、民衆を欺かれた状態においたままであることの是非、つまり啓蒙を推し進めてあらゆる欺瞞を解消するべきか、それともある程度にとどめておくべきかという啓蒙の限度をめぐる考察となった。メンデルスゾーンそしてカントの啓蒙論は、この水曜会での啓蒙論議を下敷きにしたものであり、水曜会の機関誌『ベルリン月報』誌上で公開されることになった。

メンデルスゾーンとカントの啓蒙論で、啓蒙の限度が主要な考察対象となっていることをまず簡単に確認しておこう。両者の議論に共通するのは、啓蒙を推し進めることのできる状況をあきらかにすることにあつた。メンデルスゾーンは、啓蒙をすすめるにあたって、人間としての人間の使命 *Bestimmung des Menschen als Mensch*、市民としての人間の使命 *Bestimmung des Menschen als Bürger*、という人間のおかれたふたつの状況を、啓蒙の条件と位置付けている¹⁷⁾。市民としての使命が、身分や職業にとまなう様々な義務等、現実の社会に生きる人間が取り去ることのできない個々の社会的な取り決めを考慮する啓蒙であり、人間としての使命は、いわば普遍的に万人を対象とした啓蒙と言い換えることができるだろう。この啓蒙の区分は、ひとしく万人の啓蒙をおしすすめていくのか、それともあくまでも市民生活に齟齬をきたさない限りでの啓蒙を推し進めていくべきかを確かめる、ベルリン水曜会での議論に対応している。

メンデルスゾーンは、啓蒙の限度をさらに詳しく輪郭づけるために、人間と市民のそれぞれの使命に本質、非本質という細区分を設定する。人間としての本質的な使命とは「それなくしては人間が動物と同じような状態にまで落ちてしまう」¹⁸⁾ような条件、つまり真理を追求する知性の獲得を第一と考える立場としかえることができよう。それに対して、市民としての本質的な使命は、それなくしては社会体制が崩壊してしまうようなもの、当時の

15) Werner Schneiders, *Die wahre Aufklärung*, Freiburg 1974, S. 18f.

16) Ludwig Keller, *Die Berliner Mittwochs-Gesellschaft. Ein Beitrag zur Geschichte der Geistesentwicklung Preussens am Ansgange des 18. Jahrhunderts*, in: *Monatshefte der Comenius-Gesellschaft*, V Bd. (1896), Heft 3 u. 4, S. 67-94; hier S. 74f.

17) Moses Mendelssohn, *Ueber die Frage: was heißt aufklären?* in: *Berlinische Monatsschrift*, 4 Bd. (1784), S. 193-200, hier S. 196.

18) Mendelssohn, a.a.O., S. 197.

社会の安定した基盤を維持する立場となる。そしてこの人間としての本質的な使命と市民としての本質的な使命が調和せず、国家の体制の崩壊の危機なくして啓蒙をあらゆる身分の人に広めることができないような場合には、哲学者は口に蓋をするべきだと、市民の本質的使命を優先している。さらにメンデルスゾーンは、人間の本質的な使命のために、人間の非本質的な使命、つまり共同体のなかでのみ通用しているような相対的な真理や慣習や宗派を取り壊さざるを得ない場合にもまた、非本質的な先入観 *Vorurtheil* は受け入れたほうがよい¹⁹⁾と結論づけていた。

勇気をもってみずからの知性を働かせることを啓蒙と定義したカントもまた、「どのような制限が啓蒙の妨げとなり、どのような制限が妨げとならないのか、そればかりか啓蒙を促進するのであるか」²⁰⁾と啓蒙の限度を問うている。そこでカントは、周知のように、理性の公的な使用と私的な使用という区分をもちだす。「その人にゆだねられた市民の職務または官職において許されている理性の使用」をカントは私的使用と呼び、こうした職務という大きなシステムの一員である場合は、「議論をすることは許されない」、「従うしかない」と論じた²¹⁾。

このように 1780 年以降の啓蒙論争のなかで、啓蒙は可能な道または限度を模索しながら実践される運動となっていった。こうした啓蒙論争と対比させてみると、あらゆる誤謬を悪としたベッカーの受賞論文は、啓蒙にナイーブな信頼をおくものと映るだろう。また啓蒙を推し進めることによってもたらされる社会の流動化ないしは反社会的な帰結をなんとかして押さえ込む道を探っていたプロイセンの知識人にとって、人々を欺いた状態におくことを強く否定し、万人の啓蒙をよしとするベッカーの主張は危険なもの映ったはずだ。たとえば水曜会の中心メンバーであった出版者フリードリヒ・ニコライが、ベッカーの受賞論文の出版を言葉少なに断った事実は²²⁾、ベルリンの知識人が啓蒙に認めることのできた限定的な役割と、ベッカーが啓蒙にこめた期待との大きなズレをうかがわせるエピソードである。

ベッカーと 1784 年の懸賞論題

ベッカーの啓蒙論は、具体的には、民衆啓蒙という方向をとり、民衆向けの実用的な書物の出版活動として結実することになる。1785 年には、『農民啓蒙試論』、そして 1788 年には、大ベストセラー『農民のための救難便覧』が出版されることになる。この『救難便覧』は、

19) Mendelssohn, a.a.O., S. 198.

20) Immanuel Kant, *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?* in: *Berlinische Monatsschrift*, 4 Bd. (1784), S. 481-494.

21) Kant, a.a.O., S. 484.

22) Vgl. Siegert, sp.633. 結局ライブチヒのクルジウス書店から出版することになった。

架空の村を舞台とする物語の形式をとった読みものであったが、農民が幸福に暮すことができるよう農村をとりまくありとあらゆるエピソードを盛りこんだ農民版百科全書とでも呼べる書籍であった。もちろん識字率の低かった時代、ベッカーは、『救難便覧』を農民が自ら手に取ることを想定していたわけではなかった。実際のところ、領主をはじめとして学校教師や牧師などが購入し、読み聞かせを通して広まることを目指したメディアであった²³⁾。

このようにベッカーの活動と重ねあわせてみると、『ドイツの新聞』紙上でおこなわれた1784年の懸賞課題は、ベッカーがベルリンのアカデミーで受賞したみずからの啓蒙論を公にしてから、本格的な執筆活動に入りはじめる時期に位置するものであったといえる。この時期のベッカーの活動をもう少し詳しくたどりながら、『ドイツの新聞』の懸賞課題にベッカーの啓蒙論がどのように引き継がれているのかを確認することにした。

ベッカーは1780年の受賞後、後に活動の基盤となるゴータのロッジ・オリエントにてフリーメーソンに加入している。同時に1778年から続けていたフォン・ダッハレーデン家での家庭教師職を辞し、ドイツ各地の友人を訪ねる旅行を続けることになった²⁴⁾。1782年には知人で教育者のクリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマンの誘いに応じてデッサウの汎愛学舎のスタッフとなっている。汎愛学舎では、講義をするかたわら機関誌『若者そしてその友に向けたデッサウの新聞』（以下『デッサウの新聞』）（1782年から1786年まで発刊、ベッカーが編集に携わったのは1872年と1873年の2年間）の執筆も担当した。この2年間の記事はすべてベッカーがひとりで書いたと伝えられているが、彼のオリジナルな記事ではなく、既に発刊されている雑誌や書籍から選び出した記事に手を加えて収録されたものであった。他人の記事の再録という聞こえは悪いが、著作権というものがまだ確立されていなかった時代では、どの雑誌でも普通に行われていたことであった。

デッサウの汎愛学舎での仕事も同僚教師との関係がこじれてうまくいかず、ザルツマンが取り組んでいたシュネップフェンタールでの学校設立に参加するため、デッサウの職を辞しザルツマンのもとへ向かう。しかしザルツマンとの関係も良好とはいえず、ベッカーは結局、ゴータにて出版活動で生計を立てる道を選んだ。デッサウで雑誌編集に携わっていたことで、ある程度の読者を獲得する自信があったのだろう、ゴータで最初に取りかかった仕事が『ドイツの新聞』の刊行であった。『デッサウの新聞』読者をそのまま呼び込むために、その体裁から掲載する各地の短いニュースまで、『デッサウの新聞』をそのまま踏襲している²⁵⁾。

『デッサウの新聞』そして『ドイツの新聞』の特徴は、次の3点にまとめることができる。

23) Vgl. Rebekka Horlacher, *Volksbildung als Berufsbildung bei Pestalozzi*, in: Hanno Schmitt, Rebekka Horlacher, Daniel Tröhler (Hgg.), *Pädagogische Volkssaufklärung im 18. Jahrhundert im europäischen Kontext: Rochow und Pestalozzi im Vergleich*, Bern 2007, S. 112-124; hier S. 115.

24) Siegert, a.a.O., sp. 619, 638.

25) 田口、前掲載書、pp. 79f; Siegert, a.a.O., sp. 671.

まず両誌ともに、「若者のため」という言葉が副題にあるように、子どもを読者として想定している点だ。受賞論文は公開されてはいないが、例えば子ども向けの懸賞論文も企画されている。また読者である子どもからの手紙も紙面にはたびたび登場する。第2に、両誌の主要記事は、数行からなる各地のニュースであり、編者であるベッカーの論文のようなものは一切掲載されていない。また記事は出版地であるデッサウそしてゴータのローカルな出来事と、ロンドン、パリ、ベルリン、ハンブルクなどいわゆる国外（領邦外）の情報、また毎号必ずでてくるのだが、新大陸やコンスタンチノーブルなどヨーロッパ外の情報にも等しく紙面が割かれている点も特徴だ。とりわけ1783年から1784年では、アメリカ独立についての記事が継続的に掲載されている。国内と国外の情報を幅広く集めることで、読者である子どもたちには、幅広い視野を身に付けてほしいという期待がこめられているのだろう。第3の特徴は、各地のニュースに折り込まれる形で伝えられる子どもの養育への関心である。ただしやはり具体的な提言というよりも、10人の子どもに加えて姉妹の子まで苦労して育てた母親や、孤児院の設立など、子どもに関連する出来事を伝えようとしている。1783年から84年にかけての冬は厳しかったようで、薪の無償配布といった慈善活動²⁶⁾、また84年の夏には、雪解け水による各地の河川の氾濫と募金活動のニュースも目を引く²⁷⁾。

この時期のベッカーの啓蒙理解を知ることのできる記事として、1875年の『ドイツの新聞』の年頭記事を紹介しておきたい。

「依然として何千もの人々が、ローマではラブレを、パリではメスマーを、ベルリンでは占星師を信じている。ドイツの村々では、ツイーエン氏の予言が当たるのではないかと恐れられている輩が多数いる²⁸⁾。[...] アカデミー、大学、その他もろもろの学術機関で賢くなることがなんと稀なことか、ディンゲルデイまたはフォン・シュールシュタイン²⁹⁾のように子どもに接する教育者がいかに少ないことか。」³⁰⁾

この記事からは無知蒙昧を追い払う教育者が依然として少ないことへの嘆き、そしてまた、アカデミーや大学への失意も読み取ることができる。こうした状況を改善するものとして期

26) Vgl. *Deutsche Zeitung*, 1784, 8.St.

27) Vgl. *Deutsche Zeitung*, 1785, S. 157.

28) 上記の3名について。Bedeckit Joseph Labre (1748-1783) 現在のパ＝ド＝カレー県の小村に生まれ、シトー会に所属、慈善活動をおこなった。奇跡的な治癒をおこした人物としてあがめられていた。Franz Mesmer (1734-1815) 動物磁気を提唱し、静電気を応用した彼の治療法は当時のヨーロッパでもはやされていた。Conrad Siegmund Ziehen (1727-1780) 神学者であったが、1783年当時、死後公刊された (*Nachricht von dem bevorstehenden Erdbeben*, Frankfurt u. Leipzig 1780) に書き残されていた世界の終末をもたらす地震の予言について世間で騒がれており、この予言を論駁する書籍も多数出版されていた。ベッカーは、上記3名を、誤謬を民衆に植え付ける代表的な人物とみなしている。

29) Johann Peter Dingeldey ダルムシュタットの教育者。Ferdinand Kindermann von Schulstein (1740-1801) 現在のチェコ、イトムニェジツェにて学校改革をおこなった貴族。

30) *Deutsche Zeitung*, 1785, S. 4.

待されているのが、読書協会や図書館であった。こうした施設がひろまりつつある状況は「遊びの会やら飲みのをを駆逐して、国民全体の趣味や考え方により影響を与えつつある」³¹⁾とベッカーは好意的に評価している。そしてこれに続く次の一節が重要だ。

「次のことは議論の余地はない。もしも国が幸福でなければならぬとするならば、農民、日雇い、職人には、たしかに学識 *Gelehrsamkeit* や洗練 *Verfeinerung* というものは必要ないかもしれない、ただし啓蒙は必要だ。だがこの点について、依然として多くの学識ある賢い人々は疑い続けている」³²⁾。

メンデルスゾーンとカントの啓蒙論が発表されたばかりのこと、ベッカーは、彼らに匹敵するような議論を十全に展開しているわけではないが、学識や洗練といったものを啓蒙から区別して、農民や職人といった下層の人々にも、やはり啓蒙が必要であると、強く主張している。また別の箇所では、「社会の変革なくしても啓蒙は可能である。貴族や金持ちたちの啓蒙すれば、それこそ富を正しく社会のために使うことになるだろう」³³⁾と、貴族への啓蒙の必要性も説いている。このような記述から、ベッカーは、あらゆる身分に啓蒙が必要との立場を維持していたといえる。そしてまた、ベッカーが思い描いた啓蒙が行き渡った世界についても、この雑誌の中には次のように描かれている。

「民衆というものは、一族で家族を作り、この地上で、お互いに生活してきた。居住地の特徴に応じて、そこにあった作物を育て、異なった技術を身に付け、そして異なった知見や能力を習熟する。そして民衆は、自分たちが必要とする以上の余剰を手に入れば、他人と交換する。その結果、あらゆる人によってあらゆるものが享受されることになる。」³⁴⁾

ベッカーは啓蒙によって社会が不安になるとは考えていなかった、啓蒙が浸透することによって、人々の仕事は分業され効率化されて交流がすすみ、結果として社会全体が豊かになると考えていたのである。「このような幸福を求めることによって、人は、その職務においてもまた、今まで以上に正しくそして良く行為することができ、今まで以上の成果を求めることができる。そう考えれば、啓蒙された農民がいるように、啓蒙されていない学識人もいるということになるだろう、いや現実にそうなのだ」³⁵⁾。ナイーブという批判は免れないが、ベッカーにとって啓蒙は万人が各人の責務を正しく果たすようになるために必要なプロセス、その意味で社会の善に直結するものであり、その善の希求という意味での啓蒙は必ずしも知を有する者から無学の者へ、または社会の上層から下層へと浸透するものではないと考えていた。知識人こそが、啓蒙の担い手であると考えて、民衆にどの程度の啓蒙を許容すべきか

31) *Deutsche Zeitung*, 1785, S. 4f.

32) *Deutsche Zeitung*, 1785, S. 5.

33) *Deutsche Zeitung*, 1784, S. 126.

34) *Deutsche Zeitung*, 1785, S. 2.

35) *Deutsche Zeitung*, 1785, S. 5.

と議論していたベルリンの知識人たちから距離をとるベッカーの啓蒙理解を、ここに読みとることが可能であろう。

1784年『ドイツの新聞』の懸賞論題

これまで確認してきたようなベッカーの啓蒙への期待は、1784年の『ドイツの新聞』の懸賞論題にも強く反映されていた。論題は、『ドイツの新聞』の発刊初年度の第2号の付録のなかで告示された。この論題はベッカーが以前から構想していたものというよりも、外的な要因から早急に起草されたものと考えられる。その理由が、「子どもの病んだ心を健康にもどすにはいかなる手段はいかなるものか」というタイトルにある。「子どもの病んだ心」を「健康」にするという病と治癒のメタファーが用いられているが、このメタファーにもまた、ベッカーのベルリン知識人たちへの批判がこめられていた。

ベッカーが起草したこの懸賞論題は、マグデブルク近郊ベルゲ修道院のフリードリヒ・ガブリエル・レーゼヴィッツがほぼ同時期に告示した懸賞論文への当てつけであった。レーゼヴィッツの懸賞論題は、「健全なる知性を働かせるための論理」を問うものであった³⁶⁾。この論題への回答論文の送り先として、ベルリンのニコライ書店の名前がでていることから、レーゼヴィッツの論題が、ベルリンの知識人たちの立場に与したものであったことがわかる。

レーゼヴィッツの論題は、彼が1773年に発表した『健全なる理性の用法ならびに公益に奉仕する働きへと向かわせる市民の教育について』の問題設定を引き継ぐものであった。「学識人は、真理を求める。時には、かつて他者が迷い込んだ迷宮からも、真理を探し出すことがある。しかし市民、職務に就く市民は、健全なる真理 *die gesunde Wahrheit* を受け入れ、この得られた真理を自らの職務に役立てるものだ³⁷⁾。レーゼヴィッツは、学識人の育成と市民の教育とを峻別する立場をとった。学識人は、時間をかけて、真理を獲得するが、「職務につく市民は、学識人たちがどのように真理を得たのかということを知る必要はない、かれら市民の健全な知性 *sein gesunder Vernunft* に光を当て、習慣やら考えやらを改善してくれる、学識人たちの奮闘の結果だけを知るだけで十分なのだ³⁸⁾。レーゼヴィッツが市民に認めたのは、限られた与えられた真理だけを受け入れれば事足りるとする立場であり、それこそが市民が身につけるべき健全な理性であった。

このように啓蒙に限度をもうける立場から発せられた論題に対してベッカーは批判的な立

36) 受賞者および受賞論文は次の通り。Heinrich Matthias Friedrich Ebeling, *Versuch einer Logik für den gesunden Verstand*, Berlin 1785. なおニコライの書店から出版された。

37) Friedrich Gabriel Resewitz, *Die Erziehung des Bürgers zum Gebrauch des gesunden Verstandes und zur gemeinnützigen Geschäftigkeit*, Kopenhagen 1773, S. 12.

38) Ebenda.

場を表明する必要があったのだ。ベッカーは、『ドイツの新聞』で自らが告示した懸賞課題の意図を、「自分で考えることの欠如、それこそが知性の重大な病であり、これは子どもたちだけに見られるものではなく、あらゆる職務のなかに、社会生活のあらゆる関係のうちにはびこっているものだ」³⁹⁾と明らかにしている。つまり子どもの病んだ知性を健康にするという論題でもって、ベッカーは、許容された真理をただ受け取る態度を批判して、自ら考えるようになるための方策を広く募ったのであった。それだけでなく、限度ある啓蒙において健全な知性と健全な真理が得られる、と考えるレーゼヴィッツが用いる「健全」という言葉に隠された限度を、ベッカーもまた「健全」という用語を取って使うことで明るみに出そうとしたのだ。このようなベッカーの啓蒙の限度への批判を、ハイネの『回答』ならびにその付録として発刊されたベッカーの解題から確認することにした。

「一度でも鉄にサビがでてしまったら、落とすには苦労が必要となるように、[...] いちどもでも子どもが誤った観念を抱くようになってしまったら、それを取り除くためにはとんでもない労力が必要となる」⁴⁰⁾。このような言葉からはじまるハイネの『回答』は、子ども知性への悪影響をことこまかに列挙して、それらを避ける具体的な手段を提案するものであった。例えば、幽霊やら悪党やらの話をして、子どもの柔な神経に無用な刺激を与える乳母や子守への批判⁴¹⁾、また同様の理由から家庭教師への注意などである⁴²⁾。幽霊話などに小さい頃から慣れ親しんでいることの問題を例証するために、医者と呼ばれに遣わされた若者が、村外れでみかけた女性を、幽霊と勘違いして、結局医者をつれてくることができなかつたという逸話も収録されている。若者が見間違えた女性は、少年の近くに住む女性でたまたま夕方に藪で薪を集めていただけだったというのだ⁴³⁾。

「人間の心は、人間の知性にはいまだに謎である。若い頃に過ちや愚行に浸ってしまうことがあれば、再び過ちや愚行に惹かれ、次第に慣れ親しみ、しまいには好むようになってしまう」⁴⁴⁾。だからこそ、大人たちは、子どもにあれこれを信じるよう強制してはならず⁴⁵⁾、むしろ正しく疑うことができるようにさせることが必要となる⁴⁶⁾。そのためにも、小さい頃から真理と称していろいろな知識を子どもに詰めこむことは逆効果、子どもの好奇心は知性の芽であると理解して⁴⁷⁾、子どもの素朴な質問に丁寧にむきあわなければならない。また領主

39) *Deutsche Zeitung*, 1785, Nachricht des 22. Stückes.

40) Hayne, a.a.O., S. 23f.

41) Ebenda, S. 15f.

42) Ebenda, S. 26, 37f.

43) Ebenda, S. 45ff.

44) Ebenda, S. 49.

45) Ebenda, S. 78.

46) Ebenda, S. 85.

47) Ebenda, S. 89.

ごっこや裁判ごっこなどの遊びを通じて子どもの知識を増やすこと⁴⁸⁾、また学校でも、ただ書物から知識をえさせるのではなく、戸外での自然観察などをとりいれ⁴⁹⁾、身体の養育も忘れてはならないという⁵⁰⁾。

ハイネの『回答』は、人間の疑う能力を促すための、理論的というよりは実践的なアドバイスが詰め込まれた論文であった。そしてこの疑う能力が啓蒙の基礎となることをベッカーは認め、ハイネの『回答』を受賞論文として採択したのである。ベッカーは、この実践的な『回答』を、当時の心理論 *Seelenlehre* のコンテクストへと接合させるために、『回答』の付録として解題を寄せている。そこでは経験論的な術語を用いて、子どもの知性の病は、こどもが空虚な観念を抱くことにあると解説している。心が抱いている観念が何であるのかを、子ども自身が常に分かっているようにさせなければならない。とりわけ幼い子どもは、五感に根付いた観念しか持てないことを忘れてはならないとベッカーは注意する⁵¹⁾。空虚な観念でもって思考することは、食べ物を消化できずに体調を崩している状態とちょうど同じ、知性が病んでいる状態だというのだ⁵²⁾。

このような知性が病んでいる状態は、とりわけ、いわゆる上流の階級 *die sogenannten gesitteten Stände* に頻繁にみられるのであって、小さい頃から社交の場に顔をだすような習慣や表面的な形だけをとりにくろう *Formelsucht* 習慣によって助長されるものだと⁵³⁾、上流階級こそが、この知性の病の温床であることをベッカーは告発する。知性を働かせることは、魚が泳ぐことができるように、人間ならだれでもがもっている権利にあたるのであるから⁵⁴⁾、どんなことがあっても、その権利を犠牲にするようなことがあってはならない。「若者の教育に無関心であること、あらゆる身分の啓蒙を故意に妨害すること、誤謬や悪徳を広めることは、国にとっての犯罪である」⁵⁵⁾としめくくる。

限度ある啓蒙に対抗して、ハイネの『回答』ならびにそれを敷衍するベッカーは、子どもの教育のなかに、万人の啓蒙の可能性をみてとっていた。自ら思考することの必要性はカントも説いたが、『ドイツの新聞』紙上の懸賞論文で特徴的なのは、啓蒙の問題を、個人の能力の問題としてではなく、教育環境や社交のような人を取り巻く環境の問題としてとらえており、その環境の改善を提案している点だ。つまり誰もが通る教育環境を整備することによって、社会全体の啓蒙につながるという立場であった。このような啓蒙の可能性の模索は、「現

48) Ebenda, S. 97 u. 99.

49) Ebenda, S. 127.

50) Ebenda, S. 132.

51) Ebenda, S. 164. ハイネの著作に続けてベッカーの解題が収められている。

52) Ebenda, S. 162.

53) Vgl. ebenda, S. 162.

54) Ebenda, S. 177.

55) Ebenda, S. 178.

在の社会状況において自ら考えることを妨害している要因は何か⁵⁶⁾という1785年に告示される懸賞論題へと引き継がれることになる。この『ドイツの新聞』の新しい懸賞論題で受賞したカール・トラウゴット・ティーメの論文⁵⁷⁾では、国家、社会、学校、家庭環境と、人間をとりまく社会環境が、人間が本来有するみずから考える能力を、いかにして働かせないようにしているのかが、事細かに検討されている。ここで批判の矛先がむけられているのもまた、必要なだけの知性を与えればよしとするような啓蒙の限度を求める立場であった。とはいえこうした啓蒙の徹底がナイーブな理想であることもまた忘れてはならない。ハイネの『回答』、更にティーメの受賞論文を含めて、ゴータで芽吹いた啓蒙論の可能性を、当時思想史的なコンテクストに位置づける作業を稿をあらためて論じることにはしたい。

56) *Deutsche Zeitung*, 1785, Nachricht des 22. Stückes.

57) Karl Traugott Thieme, *Ueber die Hindernisse des Selbstdenkens in Deutschland*, Leipzig 1788 und Gotha 1791. 1791年の版には冒頭にベッカーの解題が寄せられている。

Andere Wege der Aufklärung — Eine ideengeschichtliche Erörterung
der pädagogischen Aufklärungsdiskussion in der *Deutschen Zeitung* (1784).

Kotaro YOSHIDA

1784 wurde eine Preisfrage in der *Deutschen Zeitung* in Gotha angekündigt. Die Frage lautete: „Welches sind die besten Mittel den kranken Verstand eines Kindes gesund zu machen?“ Die vorliegende Abhandlung versucht zum einen anhand dieser Fragestellung und zum anderen unter Bezugnahme auf die ausgewählte Preisschrift einen anderen Weg der Aufklärung aufzuzeigen. Am Anfang wird ein spezifischer ideengeschichtlicher Hintergrund der Gelehrten zu jener Zeit in Deutschland nach 1780 diskutiert. Schon 1780 in Berlin wurden zwei Preisschriften der Preisfrage der Preußischen Akademie ausgewählt und veröffentlicht. Die Berlinische Preisfrage, die eigentlich von dem damaligen Herrscher Preußens Friedrich II. entworfen wurde, enthüllte die ‚gefährliche‘ Seite der Aufklärung, die die ständische Gesellschaft abschaffen wollte. Als selbstkritische Reaktion darauf versuchten die Berlinischen Gelehrtenkreise um ihre prominentesten Vertreter Moses Mendelssohn und Immanuel Kant die Auswirkungen der Aufklärungsbewegung einzuschränken. Rudolf Zacharias Becker, der Publizist der *Deutschen Zeitung* war eine weitere Hauptfigur, der im Gegensatz zu den Berlinischen Kreisen die Aufklärung alle gesellschaftlichen Schichten durchdringen lassen wollte. Die Preisfrage in der *Deutschen Zeitung* von 1784 und die ausgewählte Preisschrift von Heyne reflektierten Beckers Idee der Aufklärung. Diese Abhandlung erkundet einen Lösungsvorschlags Beckers, der einen möglichen Weg der Aufklärung in der Kindererziehung sah. In diesem Sinne kann man, wie gezeigt werden soll, auch hier eine Kopplung zwischen der Aufklärung und dem Anfangspunkt der modernen Erziehungsidee beobachten.